

〈資料〉

『無能和尚勸心詠歌集』 翻刻と解題

関口 静雄

A Reprinting of “Munohosho-Kanjineikashu”

Shizuo SEKIGUCHI

※

当該書名は巻頭に付された序にあるを採った。序にあることと、「詠歌集」を冠する和歌集は多数あるゆえである。その序によれば、『無能和尚勸心詠歌集』は無能自作の詠歌をその没後間もない享保六年（一七二一）春に、弟子の良照不能が収集整理して一卷に編んだものと知れる。

良崇守一 無能（六三二七九）は江戸時代中期の浄土宗捨世派の僧で、陸奥国石川郡須釜村の人。天和三年（一六六三）同村矢吹家に生まれ、十四歳で発心して、元禄十二年（一六九七）十七歳の春に伊達郡桑折の浄土宗大安寺に投じて得度し、五月には磐城専称寺檀林に入寺し修学に精励した。翌十三年出羽亀岡の大聖寺に参籠して文殊菩薩に自行化他の所願達成を祈願し、下総国飯沼弘経寺・武州江戸増上寺檀林に参学して学究を深めた。宝永二年（一七二五）二十三歳の時、専称寺二十一世良通から宗脈と戒脈を伝授されたが、遁世して伊達郡川俣に小庵を結び、持戒持律、常座不臥、日課六万遍の念仏行者となり、三十一歳の正徳三年（一七二三）四月、川俣の庵で自ら男根を断ち、日課十万遍の念仏行者となった。羽州村山

郡はじめ陸奥の伊達郡・信夫郡・安達郡・相馬郡を巡錫布教すると各地で信者が群参した。享保二年（一七二七）五月、安達郡本宮に巡錫中におこりを患い、伊達郡北半田の自庵に戻ったが回復せず、享保四年（一七二九）一月二日、三十七歳の生涯を終えた。茶毘のとき、光輝く小さな舍利が多数現れたことから各地に無能骨の舍利信仰が生じ、無能講が結ばれて命日の一月二日には数珠廻しが今も行われている。無能の生涯は『無能和尚行業記』二巻、『無能和尚行業遺事』一卷、『無能和尚勸心詠歌集』一卷、『近代奥羽念仏験記』三巻、『勸化道場奇特集』などによって知ることが出来る。奥羽地方に大きな教化の足跡を残しただけでなく著作にも優れ、女犯を知らぬ高僧また清僧と仰がれ、後代の僧俗に多大の影響を与えた。月泉撰『待定法師忍行念仏伝』で知られる出羽の待定法師、厭求撰『孝子善之丞感得伝』で広く知られる松野善之丞（法名直住）はともに無能から面受して教導を受けた人で、亀岡大聖寺で入定した待定法師にいたっては、無能に倣って男根を切除している。

無能の行実が巷間衆庶にかように把握されていたかは、伴蒿蹊編

『近世崎人伝』(五卷五冊) 卷一に収載された無能伝に象徴されている。後代多くの無能伝は例外なく『近世崎人伝』を踏襲しているからである。もともと蒿蹊(一七六一六〇)も『五僧記事』所載の無能伝を採録し仮名に改めたのであるが、主要部分をそのまま引用する。

陸奥の無能和尚は浄宗の大徳にして、四十未満の遷化なれども、其間自行化他の行業類なきことは、其伝記既に世に行るればこゝに挙ず。中に一奇行、安きにゝて甚難きことを記す。まだ若くして行脚の折、或家に投宿有しに、その家に好女子あり。和尚の面貌甚美に、伝記には地蔵ぼさつの化身といへり。其美知べし。の化身といへり。其美知べし。氣韻清高なるを見て、恋慕のおもひ焼がごとく、起居静むるに堪ず。夜深更に及び、しのびて其寢室に至りしに、和尚はもとより常座不臥を持すれば、屏風を廻らしたる中央に端座して、微音に念仏せり。女子やがて背より抱くに、おどろくけしきなく、念誦気平かなるさま、猶蜚蚊の樹を撼すがごとく、蚊子鉄牛を噛むがごとし。半時ばかりをへて、女自放て出たり。朝に及て狂を発し、独言して恥をのぶ。和尚憐みて、為に念仏を授て後、やうく愈ことを得たり。女子是より後、終身嫁せず、念仏して逝せりとぞ。

(宗政五十緒校注『近世崎人伝』続近世崎人伝) 平凡社東洋文庫、昭和四十一年一月)

※

師の無能没後、その詠歌を収集整理して『無能和尚勸心詠歌集』一巻を編んだ良照不能(一七〇一七六)は、陸奥国伊達郡金原田村(現福島県伊達郡保原町金原田)の木戸六右衛門の二男。正徳二年(一七三三)十二月、十三歳で同郡保原浄運寺六世良恩の膝下で得度し、同五年十一月、十六歳のとき磐城国山崎専称寺で修学した。無能と不能の行実研究に詳細を極める長谷川匡俊氏『近世の念仏聖無能と民衆』(平成十五年九月、吉川弘文館)によると、正徳五年(一七五五)は無能が本格的に念仏勸化をはじめた年で、翌六年には奥州巡錫の折り二月と十一月に浄運寺を勸化道場としていることから、そのころ二人は

出会ったものと推量され、また不能の法名も無能に倣ってみずから号したもので、それは無能の後継者としての宣言であると指摘される。不能は師無能の行業の称揚にとめていたが、晩年は律院の起立を遺願して没した増上寺四十五世大玄(一六八七七五)の高弟千如らに招請されて江戸目黒に長泉律院を創し、律僧として活躍した。長泉律院は大玄を開祖とし、二世不能・三世徳門・四世堯雲と法灯を継承する。なお『無能和尚勸心詠歌集』に賛題を寄せた長泉律院十六世鸞山は、その著『長泉道光普寂大和尚行状記(普寂徳門和上傳)』(大島徹水編『願生浄土義』所収。明治四十四年八月、成等庵報恩出版)に、「師長泉に於て第三世たり、然れども開山大玄大僧正は、唯だ開創の主たり、二世不能律師に至ては、營建未だ成らず、營建既に成て、實に住持せし者は師を始となす」と評しているが、いささか不能の行業を軽視しているように思われる。

※

管見によれば、『無能和尚勸心詠歌集』の版本には雫東小松谷御坊蔵版と東都驪山長泉律院蔵版の二種がある。無能作の和歌を収めた「詠歌集」に異同はないが、「附録」に小松谷御坊蔵版は無能作『伊呂波和讃』を載せるが、長泉律院蔵版は不能作『無能和尚行状和讃』と『無能和尚の遺骸を茶毘して舍利を得』并舍利靈驗の事』『師の肖像造立の事』を載せるなど異同がある。なお小松谷御坊は、古く小松内大臣平重盛の灯笼堂の地で、平家没落後、月輪禪定九条兼実の山荘となった。兼実はここで法然を戒師として剃髪出家し、法然は法難に遭ってこの地から配流地の四国に旅立った。応仁・文明の乱で焼失したこの浄土の聖跡を正徳年間(一七二一七五)に知恩院の義山が復興し、弟子の慧空が中興したという。現在は清涼山光明真言院正林寺を称する。

『勸心詠歌集』所載の詠歌部はすでに「大日本風教叢書」「釋教歌詠全集」「國文東方佛教叢書」等に翻刻されているが、しかしいづれも編者

の校訂注釈が施されており、中には欠漏や誤積も散見する。和歌を「観念の助縁」とし、「念仏往生のころ」「念死念仏の懐」を三十一文字に託した無能の真意を慮って正鵠な翻刻を提出したい。なお無能が詠歌についてどれほど研鑽を重ねていたかは、その『補忘記』(転写本が名古屋大学図書館に所蔵される)を閲すれば直ちに了解せられる。

翻刻の底本には東都驪山長泉律院藏版天明八年(一七六八)八月刊『無能和尚勸心詠歌集全』(宮島コレクション蔵)を採った。長泉律院智昇の跋文が天明六年(一七六六)十一月であり、これが立蓮社長譽良念法子の五十回忌追福のための版行であるから、おそらく後刷と思われる。



「無能上人之像」
長泉律院藏版『無能和尚勸心詠歌集』口絵鸞山筆

〔翻刻〕

※

無能和尚勸心詠歌集

全

表題簽

宝曆五亥年

口絵 無能上人之像 鸞山筆

立蓮社長譽良念法子

五十回忌 施本
為追福

十二月十九日

表見返

無能上人之像

山鷹

口絵

〔嚴三昧〕

学法關西布化山東

□乎其德萬古無窮

常在杜多鸞山

山鷹

口絵裏

口絵裏

無能和尚勸心詠歌集序

むかし恵心僧都和哥ハ狂言綺語なりとてよみ給ハさりしかあるとき近江の湖水を眺望し給ひけるにかたへの人滿誓沙弥かこきゆく船のあとの白波とよミし古歌を吟しければ僧都ことに感じ給ひはしめて和哥ハ観念の助縁なるへき事をさとり給ひ序01けるとそしかり法花の二十八品浄土十樂のうたと折にふれて詠し給ひけるとかや其峰の古徳も和哥をもて道のたすけとし給ふためし少からず就中宗祖圓光大師念佛往生のころを詠し給ふ和哥あまた有けれハ師もまたかの古風をしたひてより〳〵三十一字をつらね念死念仏のおもひをのへられ侍る序01その詠草をひろひあつめて一卷となし勸心詠歌集と名つけ厭離穢土の驚策にそなへ欣求浄土の教誡にあつるのミこれを見これをきかむ人おなしく心を發しともに願行を増進し給へといふことしかり時に享保六年のはる弥生なかはの比専修浄業の弟子唯憑不能子ミちのおく保原浄運蘭若に序02して謹てこれを記す

侍從藤原廣〔花押〕書之序02

勸心詠歌集

念佛三心のこゝろをよめる

いつはらすまたうたかハす彼國をねかふハ三の心なりけり

同じく四修の心を

うやまひて唯御名はかり怠らす命かきりにつとむるハ四修

草菴をうつせしころ

すめハまた浮世なりけり中〜にうつさし物をかりの隠家

佛に花を奉るとて

手折きて仏にそなふ花なれハ終に菩提のミをや結ハん

年の暮によめる

草の庵に置露の身の消やらて三十三とせの暮にあふ哉

信夫郡福嶋といふ所にしはらくすみ

侍るころ

つらき世をさても忍ふの山風に露のうき身もさそへとそおもふ

朝貞の花をもしろしとおもふ哉さきたつ露の身をハ忘れて

往生の障ハあらし一すちに上なき法を頼む身なれハ

教順といへる僧あるときうたかハしきこと有

とてたつねこしける返事のおくに

散乱れ濁こる心ハむまれつきさてこそ頼め捨ぬ誓ひを

無常

せきあへぬ早瀬の川の水よりも猶うつり行人の世の中

夜半に見る夢をしるへにさとりにきうつゝなからもうつゝなき世を

四方山をななめつきけハ入相のかねも一しほあハれますかな

法華經に忍辱のよろひをきてもろ〜の

難事を忍び身命をおしますしてたゝ

無上道をおしむと説給給ひし心を

02+

上もなき御法にかえしうき身そと忍ふに濁る世こそつらけれ

往西方のこゝろを

命をも身をおしまていさいなん我ふるさとの西の都に

到彼岸のこゝろを

法の橋心にかけてワたらずハいかてかしこの岸にいたらん

阿ミた佛平等慈悲の御誓ひのかたしけ

なきことを思ひつゝけて

もろ人をワかたす渡す橋柱たてし誓ひを身にかけて見よ

極重悪人無他方便唯称弥陀得生極樂

といふこゝろを

なむ阿ミたひとへに助給へかし神も佛も捨はてし身を

ミたの光明を月によそへて

難波江やさなから濁る水にたに芦間を分けてやとる月影

保護三業

なには江のあしき心の波たてす口をまもりて身にハつとめよ

念佛回向

頼むそよたゝよふ御名をしるへにて導ひき給へ人も我身も

末法万年餘経悉滅弥陀一教利物偏

増の釋に超世本願のこゝろをかねて

法の道絶えたる谷の橋柱世に名も高くたてし誓ひハ

のりの道絶えし流れの末の世をひとりそ渡すミたの御舟ハ

道絶えしうミをも渡す法の舟阿ミた佛をかちとりにして

終りよく身まかりける法友のことおもひ

出て

露の身を花の臺に置かへてくまなき空の月やとすらん

人ハはや花の戸ほそを開きてそ法とく鳥の聲や聞らん

03+

03+

02+

厭離

世のうきをいとふ心ハ堅田てふ浦のみるめのなきそ悲しき
露ほとも心なとめそ難波なる芦のかりねの夢の浮世に

04才

柴の庵にいつまでか経んさゝかにのいとくゝる世ハいとほしき哉
かく斗つらき浮世の中に猶いとふ心のなきそかなしき

出塵

出てしより浮世にとをくなるミかた波のさはきを聞も苦しき

大熊川を渡るとて如渡得船といふ事を

法の舟心のまゝにあふくまの流をはやくワたるうれしき

念佛流布

へたてなく千草の露に影うつす月の光りのミちのおくまで

念佛のくときを

04才

唱ふれハ永き世のミか仮の世のうさもつらさもまつ忘れける

欣求浮土のころを

つねハたゝ西の雲井にあくかるゝ心に身をもいつかまかせん

古人燭をとりて夜あそふ日短ふして夜の長

きことを憂ふといふことをおもひあはせて

法の道いそく心におもひやる燈火とりしむかしかたりを

世人薄俗共不諍急之事

05才

あなかなし難波のことにみをつくしおもひもよせず法の舟をハ

くるも夢さるもまほろし露の身の消へて跡なき世をな歎きそ

煩惱ハ家の犬うてとも門をいてすといふことを

とにかくにやらふかひなき家の犬打手もよハる身をいかにせん

馴たりし犬も御名よふ聲さけハ打手をまたす終に出なん

人毎に世をなけくおもひあれはいとゝうき

ことのしけくなる心を

浮草のおひこそしけれ難波江に沈つむおもひのたねし絶ねハ

遁世山居

うミワたる世の浮草の根を絶て波ときゝなす軒のまつ風

のかれても浮世の中のかくれかに心とむるといふあらし哉

煩惱ハ無始薰習にして去かたきことを

いく千度おもひすつれと世をへて馴れにしことハ忘れかねぬる

遣教経の制心一處無事不弁の心を

一かたにおもひ入たる心より御法の道のおくも見るへき

用心

心せよしける蓬の世の中にまされハやかて淺ましの身を

捨此徃彼

露の身ハ哀れあさちに消ぬとも心ハやとせ花のうてなに

彼喚此遣

こゝにやりかしこに呼ふ法の聲あゆむ心のたのミある哉

他力強縁

阿ミた仏のちかひの舟に身をよせて他力の風に帆をまかせつゝ

心地観経に猶如牽羊詣屠所漸々近死

無所逃去とあるをおもひ出て

法の道いそく心のはしにかけてあハれ羊のあゆミ忘るな

同じころを

あゆましとすれと羊の引かれてハ足ふミとめぬ行末そうき

五會法事讚に此界一人念佛名西方使

有一蓮生但使一生常不退此花還到

此間迎といふころを

唱へつる御名に蓮の生ひ立てつるの迎の花とこそなれ

05才

06才

06才

07才

獨留此經

日ハ入りて月ハまた出ぬ深き夜にかこつたかにハ南無阿ミた仏
万代の末までやミを照しつゝひとりりとゝまる法のともし火

超世本願

淺ましき身をハわきてもあはれミの深き誓ひそ世にハ超へぬる

還來度生

生れなハ法のともし火かゝけきて又も闇路に道しるへせん

御手のいと

一筋にたのミをかくる御手の糸引取給へおはり乱さす

柴の戸をワひつゝあけくれ迎の雲をまち

かねて

柴の戸にいつかゝるらん明暮におもひそめぬる紫のくも

題しらす

うき雲の末さためなき身を持てあらましかハと何思ふらん

世をもすて世にもすてられやすゝとひたすらミたの御名を唱へよ

おそからすまたはやからす文字かけす聲をはかりに御名を唱へよ

露の身のうさもつらさも忍ひつゝ死ぬる限りに南無阿ミた仏

朝夕に我身の上をかへりて三つのこゝろの有無をしるへし

けかれをもまた清きをもかえりミス立居おきふし南無阿ミた仏

はけませよいきとしいける其中にたゝ人ならて法ハえかたし

ミた頼む心はかりをまめやかに人のみるめハとまれかくまれ

まめやかに後の世とハんその人ハ浮世のほたし早くはなれよ

露ちりも高ふる心あるならハ佛もすてゝ守り給ハし

さきの世の深き契りとときく時ハ阿ミた仏のわけて頼もし

阿ミた仏をうやまふことハ武士の君につかふることく成へし

水をおよき火をきることく思ひつゝ常に障なく御名を唱へよ

087

087

077

一文字も思ひわかさる身となりて南無阿ミた佛く

何事も迷ひの種とならんをハとかく眼に見るそあしけれ

阿ミた仏に奉りたる身ハとかく思ひわつろふ心はなれよ

たすけ給へなむ阿ミた仏の外ハミな有にまかせてにもかくにも

はけむとも我身のほとをはからふて心うハてに行をしたてに

とやかくとおもふ心の乱れかミわくかたもなき我なミたかな

親しきもうときも共に皆人ハ西ゆく道のさわりなりけり

極楽へゆくハたやすきことなれと心と娑婆にとまりこそすれ

阿ミた仏と唱ふる聲ハそのまゝに西へゆくへきしるし也けり

能のなき身にハなすへきワさもなし立居起臥なむ阿ミた仏

往生ハやすしとしれよやすけれとかたく思ひて行く人もなし

しはらくの程も心をかこせかしたとひ後にハ怠りぬとも

ミたの名を唱る人ハとことハに佛聖衆の護念こそあれ

とにかくにワくかたもなき心にて唯ほれくゝとなむ阿ミた仏

いつハらす又うたかハす一筋に西にむかハんこれ三心

消やらて淺茅か露の身そつらき早く蓮におきも直さす

たのもしや御名を唱ふるその人ハミたの光りのワきて照セハ

なにことも身にしミくゝと思ハぬハ願ひはたさぬ心なりけり

阿ミた仏の誓ひたのまハおのつから身の罪とかもおそれつゝしめ

しみくゝといとふ心のなかりせハ身の終りにハふかくとりなん

やすくゝとあたゝかなるハ中くゝに怠りはつるもとる也けり

世の中ハやふれわらくつぬき捨よとても臺にのほる身なれハ

西へゆく道一筋のたかはすハ身の有さまハとにもかくにも

怠らす御名を唱ふる身ハ常にミたの御まへにあるそ嬉しき

とこしなへに心を西へかたふけハ身の終りにハたをれ入りなん

皆人の心ハ水に似たりけりすみぬにこりぬところこそよる

107

097

097

人ハミなあたし心につかはれてやすからざりし世をワたる哉

ワれと我心を師としたのむなよつねに心の師とハ成へし

穢土をいとひ浄土を願ふあたかたき色にましたることのなき哉

かしこくも深き望ミのあるならばつたなきわさに心とゝむな

いたつらにねふりあたるをにくむなよさめたらん程なむ阿ミた仏

阿ミた仏にいかなる契りありけらし昔のほとこのきかまほしさよ

法と機のさたをふり捨ひたすらに南無阿弥陀佛く

けふの日も影かたふけはうらやましいつ極樂に入相の空

おそからず聲はけましてほれくんと申す念佛のきひを覚へよ

ミな人ハよき兵の種ならんあほう羅刹の敵もおそれす

怠らすひたすら御名をよふ人ハ三つの心のありと知へし

阿ミた仏を唱ふる心いさミあらハ我極樂へゆくとしるへし

かしこくも三つの心をそなへなハこゝに居ながら極樂の人

うたかひの道しなきすらうたかひてゆへ有ことを信せざる哉

御名をよふ聲を力にやすくくと此世もおくり後もまつへき

やよいかに助給ハれ阿ミた佛かこちワひぬる我うき身をハ

阿ミた仏の誓ひの種ハはやまきぬいつ極樂の花にみのらん

後の世のおほきあたひを思ひつゝいさミすゝみて御名を唱へよ

つくくくと我身をミても人ミても口かしこくて心にふさよ

人ハミなこのてかしはのうらおもて捨るハすてすてぬをそすつ

とやかくと世を思ふ身ハ極樂を願ふ心のうとけれハなり

夢うつゝしはらくしのへけふ斗物なおもひそなむ阿ミた仏

なむとおもふ心の外に道もなし阿ミた仏のちかひまかせに

はかりなき弥たの誓ひなうたかひそよへハこたふる山彦の聲

いつハれる人の中にも誠ありすなほなからにかさるありけり

人の身をたゝさまほしくおもひなハ我すみかねを直し持つへし

117

117

117

紙むしる麻の衣手身ハたりぬ鉢の外なる物なもとめそ

よき人を見てハ心の師とあふきあしきを見てハ我が身たゝせよ

けかれさるうす墨衣色かへてうき世染きぬいかてまとハん

うかれぬるうき色衣あやなくて唯墨染をまとふ身そほし

あなにくのよしあし心其まゝに助給ハれなむ阿ミた仏

いさむともおのか心とおもふなよひとへにミたの慈悲のちからそ

御名にそふかねの響のはるくとおとろかすらんミたの御心

みとり子もいふことやすき弥陀の御名八十年の翁つとめぬも有

極樂へ行やすくして人なきハマこと有ものあらざれハなり

阿ミた仏をとなふたよりになるならハ身すきなりわひとかくいとわし

なむ阿ミたひとへにてらせ二つなく助給へといのるこゝろを

さむさをもあつさも忍ひはけむこそ誠のいたるしるしなりけり

我心世を住かへて見てあれハよきもあしきもいとふたよりそ

人をミハ失をたゝさす得を知れにかひさこにもとりえ有けり

捨られし身ほと壁山のおくハなし人のとふへき庵もまたねハ

つくくくとおもひとくにもうれしきハ得かたき姿あひかたき法

身のうへハよくもあしくもともかくも助給ハれなむ阿ミた佛

西へ行しるしハ御名を呼ぶ聲よ吴香紫雲もよ所に求めし

阿ミた佛の深く心に入ならハあつささむさもなとかおもはん

かしこきもおろかなる身もこハいかにおしきいとまをついやす物哉

たとひ身に世のうきわさをなすとも口にハたへすなむ阿ミた仏

ともかくもおもふことなき人も有にまたうたかふハたのもしき哉

阿ミた仏を怠らましくおもひなハ数返の所作に過たるハなし

嬉しさや壁山に埋むあたし身を御法の道にすつとおもへハ

法のため捨はてたりし我身にハおもひもとむることもなき哉

惜むへきかしこき道ハすてはて何おもふらんかりのやとりを

137

137

137

137

とくいとへはやく願へよやよ申せ露の命ハ今もしらぬを
世にこゆるちかひにあひしうれしきにかくてうき身のうさも忘れつ
今死すとおもふに過し寶なし心にしめて常にワするな

たゝ申せ佛のよろつふり捨て附屬し給ふミたの名号

往生ハ弓いるものに似たりけりあたりあたらぬおのか身かまへ
後の世をおもふ身ならハ捨の一字心にかけてつねに忘るな

二つなく三つなきミたの御法には万の障りあらしと思ふ
なにこともむかしのゆへとおもひ捨ひたすら頼めミたの本願

いそくへき法の道をハゆるくして夢にあらそふ心はかなし

みとり子のかこちてなげく聲きかハ母の心のさこそあるへき
道に入ひとハこの世もやすらかに後の身ハなをたのもしきかな

たとひ身ハならくの底に入るとてもかならずミたの御名をきくへし

はかなくも地水火風のかりの身を我ものかほにおもひける哉
心にハよしなきことを思ふとも口にハ常に御名を唱へよ

念佛のさはりならざる功德をハ身にたえん程これをいとなめ

散乱の心なからもひたすらになむ阿ミた佛く

唱ふれハゆくとおもひて申へし数の多少のあらそひなせそ
夢の世ハいつくもかりの一やとり心とゝむな宮もワらやも

紙衣ハ世をすて人のあやにしきもとめやすくて十の徳有

後世ねかふ身にハ病ひも知識也道をはけます便とおもへハ
極楽へ生れんことを思ひなハ絶へず唱へよなむ阿弥陀佛

かくれぬる心斗をまめやかに身のありさまハとてもかくても
心にハちかひたのミて手にハすく口に念仏ハ定れるわさ

宿もなく原篠原に死ぬるこそ世を捨人ハあらまほしけれ

すてはてし身をなおしミそ惜むともつるに野原の露と消なん
子をおもふ母よりふかき釋迦の慈悲おもひつゝけて身をな惜ミそ

15+

14ウ

14+

むつひぬる人の獨りももれすしてのほれよかしな花の臺に
おほけなき不取正覚の言の葉を思ハ、身をも露おしまし
世もつらく身もはかなきにいかなれハいとふ心のおろかなるらん

阿弥陀佛のちかひの舟にのりし身ハ娑婆のともつなとく斗也

ミたワきて不取正覚の願なくハいかてけふりのすみか出つへき
本願の舟にのりたる身ハとかく不取正覚のさほにまかせよ

人ことに我身につもる雪霜の消んとハ露もおもハさりけり
極楽ハはるけき西の外なれと誠いたれハへたつまもなし

かりの世のうさもつらさもとくへかへしていつか西へゆかなん
心から世のうき橋を渡りつゝたやすき道をとふ人もなし

けふあすと思ふ命のうちたにもはけむ心のなきそあさまし

露よりももろき命の中にすらななき望ミをおもひける哉

いつの日のいつにか消ん露の身ハけふもいのちのうちにくれけり
ゆゑもなきことな思ひそまたいハしなむ阿ミた佛く

ゆめにきてまほろしにさる一やとりともかくにも心とゝむな

よハに見る夢にかハらぬうき世かなうつりかハりて跡方もなし
世にこゆるちかひにあひてとなへすハまたや炎にこかれやハせん

すちめなきにくきうき世ハうのかわほねより西へ行く心せよ

朝貞の花にやとせし露の身とおもひとくにそうさハきへぬる

程もなくきへて跡なき露の身を置所とてなになけくらん
もるともに契るはちすの花の上たれ先立て我を待らん

あすしらぬ身とし思ハ、ひたすらに御名を唱へて後世を助かれ
あら玉の年ハむかしにかへれともとのすかたのいつち行らん

一聲もすてぬ誓ひのたねハまくやかてみのならんはなの臺に

けふをなげく心よいつをたのしまんうつりかハれと同じうき世に
やすきよとしらす月日をつむ人ハ末にそなかくたのシミハなせ

16ウ

16+

15ウ

いとひても猶いとはしきうき世かなうつゝのゆめとなるを見るにそ

古郷の戀しかりける歸るさは身のつかれをもかもひやハする

宮人もわら屋守る身もあたしの、草葉の露のあはれいつまで

夢の世はともかくても有明の月かけやとす露の間そかし

いつくにもたひの心そワすられぬつる道芝の露の身なれは

心ミつあるかなきかハしらすたゝなむ阿ミた佛といふはかり也

峯のかせ谷の闇きにおもふかなかの極楽にのふるみのりを

永き世をさそやなけかんおのつかからおのれをせむる心ならずハ

おしむともつゝに壁原の露の身を御法の為に捨るうれしき

憂恠につけて厭欣をますへしと

いふことを

177

うき度にうき世をいとひうからさる時ハ浄土を願ひこそすれ

羽州天童三宅道意に遣しけると

此世にてちきりしむつひくちすして共に至らん同し蓮に

はるかに年月を経て古郷に歸りけるに有し

人も住家も移りかはりてむかし見しにもあ

らぬありさまのミ多くて見るにこゝろもい

とゝあはれに侍りければ

斧の柄のくちて歸りしそま人の心もかくやあはれなりけん

年々歳々華相似といふことを

春ことにかハラてはなのひらくにも猶なけかるゝ老のおもかけ

早瀬川かへらぬ波に乗舟ハきしへつく間のゆめのちきりそ

小鳥の菴にてよめる

柴の戸につれなくあたる山おろし身にしミくゝと世をいとへとや

あらたのし心ハ西にうつせみのもぬけのからのかるゝとして

184

おしなへてあたもかたきもなかりけり平等一子の慈悲のまへにハ

きのふといひけふも聞そふはかなさにいとゝうき世のいとハしき哉

さしあたる事も思ハし今とてもゆめに成行あたしよの中

極楽をワカ古郷ときゝしよりいつくもたひのかりねとハしる

女人往生のこゝろを

あしかりし難波にさわりおもき身もちかひの舟にワたさぬハなし

生死に心をとめす念佛すへしといふ事を

死なハしねいきなハいきよ夢の世にもものなおもひそなむ阿ミた仏

あるとしの冬厭求法師相馬より小鳥の

菴室へきたりしはらく逗留して歸ける

あしたわかれをなけきてかく

177

いつの日か花の臺に生れあひてけふの別のうさを語らん

相馬のきた山といふ処に住める沙門のいや

ましに世をいとふ心ふかくなり侍るよし傳

へきゝていとあはれにおもひて

世をいとふ心のふかくなる人の身にやしむらんきた山の風

七情にかゝハラされといふ事を

うさつらさ悦ひうらミたのしみに心なとめそ夢の世の中

名号をかしらにおきてよめる

なに事も佛まかせの心には思ひわつらふ言の葉もなし

むまれすハ我もさとりをとらしとのちかひにむくふ佛頼母し

あさな夕な思ひ染ぬるむらさきの雲まつはかりたのしきハなし

身にそふてかけとひとしくまもるなる仏の恵ミあはれたうとや

たれとも頼まは捨しきりとてもちかひし御名八十聲一聲

ふかくこそ立てしちかひの橋柱くちせす世々の人渡すらん

204

197

194

197

いろ見ればはやくもにこる心にてほとけにへたちとふさかり行
ちりぬるをわか身にかけてみる時ハはなも色くくとく御法かな
よの中にたれかハとまるそのまゝにつねなきものを何なけくらん
らくの世に生れハうるのうさつらさおもひ出るもくるしかるらん
ややややよよまてしはしけふこゝをこへてのゝちハはるの夜の夢
あさましやさき立はかりゆめとみて身のはかなさを知人もなし
ゑひもせず京九重のはなのうへに置露の身ハ玉かとそ見る

山居述懐

阿ミた仏照しみそなへ一筋にたすけ給へとおもふこゝろを

人のつらきもいとふ便りといふことを

かりの世をいとふ便りとしる身にハつらき人こそうれしかりけれ

護念増上縁のこゝろを

かけ添ひて神も佛も守もるかななむ阿ミた佛と申す人をハ

攝取不捨のこゝろを

一聲もすてぬほとけの御手の糸こゝろにかけて引かぬ間もなし

厭欣心のうときを

極楽を願ふにうとき心とハかりのやとりをなげくにそしる

至誠心

極楽にうとき心をなげくこそやかて至れる誠と成けり

虚假心

願へともうハの空なる人こゝろゑたり顔にそあらハれにける

わか心のまゝならぬにつけて人をうらむへからす

心たに心ならざる身にしあれハなとかうらみんなのつらさを

心から物おもふといふ事を

すてやられて心と物をおもふ哉ものおもハする人もなき世に

自己教誡

あすしらぬ世のことハりのワすられて行末をのミ猶おもふ哉

人の無常をきゝておとろかぬこゝろを

彼もきえこれもさりぬと聞なからさてもつれなき我心かな

安達郡本宮といふところに何かし

といえる人寵愛のむすめをうし

なひ侍りけるによみてつかハし

待るとて

露の身ハおくれさきたち消ぬともまた置直す一つはちす葉

先立ちし人ハ妙なるはちす葉をワけておくるゝものや待らん

愚信といふ僧信夫郡福しまといふ所にて

四十八夜の念仏をつとめけるころよみてつか

ハしける

世にこゆるちかひのかすの日をかさねつとむる功德うへハ有らしな

伊達郡川俣の菅野氏何かし火災にあひ

けるころよみてつかハしける

かくはかりうきにつけてもなむ阿ミたいとふへき世の便とそしれ

厭離穢土のこゝろを

いとへたゝ夢のうき世にかりの庵水の泡の身露のいのちを

撰集表紙のうらにかきつける

法のため浮世も身をもすてはてゝなむ阿ミた佛く

ミつから浮世をすてえぬゆへに人をうら

むるといふこゝろを

なけゝとてたれかハものを思ハする心からなる我なミた哉

不覚年命日夜去のこゝろを

行末ハいかゝとおもふあらまじにけふの命をはやワすれけり

一切時中憶地獄といふことを

20ウ

21オ

21ウ

22オ

22ウ

23オ

ななきよのくるしき事を思ひやれあつさ寒さも物の数かハ

眞實心如勁松

我心ときハの松に似たる哉世のよしあしに色をかえねハ

山居松風

あかつきのかねのひゞきにあらねともねふりをさます峯のまつ風

名取川述懐

能人と名取の川の流れなハふかき淵にや身をそしつめん

草菴山高けれハ

雲井にハつねにうかへるいほりかなまた紫の色に見なさて

なむ阿ミた仏を句の首におきて

なにこともむかし語りになる身そと思ひを留めす西へこそゆけ

むつの道ワくかたもなくまよふ身をかしこに呼ぶ聲そうれしき

あちきなき身をもしはしと柴の菴に結ふ心ハ花のうてなに

弥なを呼ぶ聲を尋ねていたる哉かゝるいやしき柴の庵にも

たれともうき世の道のうとき身ハミたに親しき端にこそあれ

佛にも神にもさこそ恵まれめ上なき道を祈る身なれば

他力のこゝろを

何こともわかなすワさと思ハすにひたすらのめミたのちかひそ

念佛行者すゝをすつへからす

つかのまもすてしとつねによふ御名もすゝを持たすハもしや忘れん

放下萬慮求一心

とやかくとおもふ心の枝きれハしける山路もワくる一すち

二河白道のこゝろを

水と火の間をワけし一筋のほそ道あゆめふた心なく

此世及後生願佛常攝受

後の世も此世もともにまかすかななむ阿ミた佛助給へと

勇猛勤精進

かこミつるあたかの関を破るにハ心をたけく御名を唱へよ

不惜身命徃西方

法のためおしからさりし我命つらくも世にハなからゆるかな

題しらす

柴の菴しはしハうきに似たれとも終りおもへハ住もたのしき

こしかた行末をおもひはからす念仏すしといふ事を

さしあたるミたの御法を思へたゝかへらぬむかししらぬ行末

本願をたのむ身のたのもしき事を

さりともと捨ぬちかひをたのむにそ便りなき身も心やすけれ

相馬のきよ橋といふ所にすむ法友のますゝ

往生の業をけむよしをきゝて

法の道はけむと聞に袖ぬれて我身もともにすゝむ極らく

弥陀の四十八願になすらへていろは文字を冠

りにおきて四十八首のうた口すさみ侍りぬ

いさゝらハもとのミやこへ歸りなん南無阿ミた佛を道しるへにて

ろもかひもとらてそ渡る西の海ちかひの風を帆をは任せて

はかなくもおのかかひなき身をたのミ弥陀に任せぬ人を悲しき

にしへ行道一筋に思ひ入りてワキ目なふりそなむ阿ミた仏

ほれゝと聲うちあけてなむ阿ミた助給へといふそ三心

へたちぬる道遠けれと阿ミた佛の誓ひ頼めハちかくこそ行け

となふれハかしこに蓮生ふるとや置へき露の身も消ぬ間に

ちはやふる神も心をなくさむときくに尊きなむ阿ミた仏

りやく世にうへなき御名を唱ふれハ何れの罪か消も残らん

ぬき捨る身をなおしミそ程もなく心ハやかて西にうつせミ

るりの地に宝らのうへきかけさゝハ浄土ハ花の錦なるらん

24ウ

24オ

23ウ

26ウ

25オ

26ウ

25オ

26ウ

をしなへてもらさすくふちかひそ思へハ嬉しつミ深き身も

ワきて世にさも行やすき西の道身をかへりミす思ひ入れかし

彼國のたのしきことをはるくと思ひやるにもうさハ忘れつ

よにこゆるちかひの舟のなかりせはくるしき海をいかて渡らん

たゝたのめよしあし人をワかすしてすくふちかひのあらんかきりハ

れきくの智者もたうとふ其御名をおろかに思ふ人そ悲しき

そのまゝに心も身もあらためすたのめハすくふちかひとそきく

つらき世もつれなき人もちしきにていといそかるゝ極楽の道

ねかハくは終りミたさて一筋にミチ引給えたよる御手の緒

なにことも佛に任せ我ハたゝな無阿ミた佛といふハかり也

らくの世に生れハうるのうさつらさ思ひ出るもくやしかるらん

むまれても又いくたひか歸りこんミち引人のあらんかきりは

うき舟の身をハなにはよするとも心なとめそよしとあしとに

ゐつこにもたひの心地そワすられね終にとまらぬ身とし思へハ

のちの世にミの蓮のたねにとてまつ唱へ置なむ阿ミた仏

おもひやれしる人もなきうき旅につるハ出たつ心ほそさを

くりかへしたゝいく度もなむ阿ミた助給へとおもひつゝけよ

やまの端にかたふく月をミてもまつなむ阿ミた仏我もいつかハ

まちかねてなけくときくに袖ぬれていと戀しきなむ阿ミた仏

けにまこと思へハうれしかゝる世に生れあハすハ法も得ましを

ふかき世のやミちもはれん万代の末まで照らす法のともし火

こゝにやりかしこによはふ聲ハきく一向あゆめ極楽のミチ

穢土をいとひ浄土を願ふ心こそうへなき道のしるへなりけり

てにハすゝ口にハ念佛心にハ助給へとおもふはかりそ

あたしのゝ露とはかりハ思ふなよ花の臺に置かふる身を

さきたちて生るゝものハたれとても花の半はをワけて待らん

28*

27*

27*

きくにたに罪ハきへぬる御名なれハ唱ふるくとくさらに上なし

ゆめの世ハとまれかくまればともなくさめて臺に上る身なれハ

目にふれてミえ給ハねと身に添ひて守もる佛の慈悲ハ尊とき

身を思ふ心そ身にはあたなれや身を捨てゝこそ身をハ助けん

しミくと思ひ入れかししからすハ三つの心のかすやかけなん

ゑきもなきわさをハすてよ阿ミた仏五劫思惟のちかひ任せに

ひに千度かよふ佛の情をハ身を盡すともいかてワすれん

もらさしと九しなき蓮はなねかハ、ゆかんよきもあしきも

せきあへぬ月日ハいとゝ早瀬川かへらてよする老のとし波

すミやかにゆきて生れんおのつからさとひらくる花の臺に

京よりは露の命もおしからす花の臺に置身とおもへは

勸心詠歌集終

29*

附録

無能和尚の遺骸を荼毘して舍利を得并舍利靈驗の事

一師一世の化縁すでにつきて享保六年正月二日逝事三十七歳にして奥州
伊達郡北半田の塞耳庵におゐて示寂せられし則願命にまかせ庵室の境
内に北を下して遺骸を土葬にし侍るしかるに六ヶ年を経て享保九年夏
の末つかた聊障難ありて遺跡を同^{01*}郡葉折の大安寺に移すことになり
しかバ法沢を蒙りし遠近の縉素相議し遺骸を荼毘して移さんとて同年
七月朔日墳墓をあばき棺を開き侍りしに遺骸巖然として初じめ葬りし
時のごとく更に臭穢有事なし群集の縉素感歎せずといふことなし其日
黄昏に及んで庵の前庭におゐて荼毘し侍るに西方の天朗然として金色
の彩雲鬘鬘たりみる人奇異のおもひをなし侍る翌二日遺骸を収めんと
するに光^{01*}輝ある舍利數百顆を得たり其色白色或ハ紫色なり舌の上よ
り其色^{01*}ことに皓潔にして光りある舍利數顆出現せりこれ則多年実修実

行せられしが然らしむる所ならんと申あへり扱数百顆の舍利を瓶に納め大安寺に安置し寺中に石碑を建て侍る師の遺骸を改葬せしにこの奇瑞あらはれしことをきゝ遐迹の諸人競ひ來りてこれを拜しぬまた曾て師を誹謗せしもの敵對せしもの念佛の信心なきものも何となく⁰²⁺己往のことが悔ひ正信を發起し念佛者になりけるもの多く侍りしこれらのこと元祖大師滅後の事蹟によく符号せり大権の所為凡慮の窺ひ測る所にあらず

一同國信夫郡山口村常圓禪寺の住持江岸月泉和尚ハ智道兼備ハリし高僧にて遠近其徳を知る所なり然るに時澆季に属し自力修行の我分にあらざる事をしり師の教化を慕ひ他力往生を願ひ称名念⁰²⁷佛せらるゝことこゝに年ありきかつて寺の傍に草堂を構へミたの三尊を安置しつねに念佛せられけるこのたび師の遺身舍利となりしことをきゝ隨處にたへず師の門人某より舍利一顆を乞求めこれを宝塔に安置し尊重瓊敬せられけるある夜舍利に向ひ祈願すらくわれもとより自力修行のことを学びていまだくハしく他力本願の案内をしらずたゞ慈誡を守りて一向に名号を唱ふるばかり也この旨はた⁰³⁺して佛意にかなひて順次に決定往生すべくバ今夜のうちに此舍利倍増し給へと一心に念佛し祈請せられしが翌朝塔を開き拝すれバ一小顆の舍利一夜のうちに倍増して多く分顆しける和尚信心肝に銘じますゝ往生の信を口称の一行に結□せられしとなん

一月泉和尚の弟子仙了長老ハ同じく師の化をうけてつねに念佛せられしがわれもまた遺身の舍利⁰³⁷を感得せまくつねゝ此事をのミおもひ煩ひ居られし或夜おもふ様かく舍利の得がたきハ我念佛の信心深からざる故ならんかしからバ又此度の往生ハいかゞ有らんとしきりにうたがひのこゝろ起りてまどろミける夢に容貌端正にしていとけだかき僧一人きたりてつげていわく汝念佛すれ共信心なき故舍利を得ざるかとな

げきしかど信心とて外にハなし願往生の心にて念佛相續するがすぐに信心なり舍利を得て念佛せねバ往生せ⁰⁴⁺ずといふにハあらねども我今汝が願にまかせて舍利を授るぞとて御手をのべ給ふ長老則手を出しこれを受取とおもへり覺て後掌をひらき見れば水晶のこたく透徹して大さ一寸ばかりの舍利を得たり長老感涙にたへず平生の所願成就しぬといよゝ称名を勇進せられける

一師の門弟厭求といへる僧師の遺身の舍利二顆を相馬の城下に持ちゆき諸人に結縁せしめられしに⁰⁴⁷同所中村といふ所に佐藤小八郎といふもの兼て師の教化を蒙りしものにて舍利を拜瞻に参り舍利塔をさゝげ持し謹て頂戴し内心に祈念しけるハ此塔中の舍利一顆を我に授からせ給へとさて諸人拜礼もすミ此事を厭求法師に申のべんとおもひけるに法師塔中より一顆を取出し申されけるハこれは是師闍維のあとの土中より出現する所の舍利にてわづかに二顆あれとも御邊ハわきて篤信の行者なるゆへ一顆を授⁰⁵⁺るなりとて給ハリける小八郎大に悦び心中に祈念せし事など語りてこれ偏に師の御はからひならんと拜受して歸りける則紙三重につゝミ佛壇に安置し崇敬しけるがある時おもふ様この舍利土中より出現せしといへばもしや舍利に似たる砂にもやあらんと半バうたがひ居ける其後ある所の百万返修行の場へ持行結縁せしめんと緘を開きしに舍利ミへざりけれハ小八郎大に驚愕してけりつくゞこれをおもふにかねて砂にもや⁰⁵⁷あらんかとうたがひし故ならんと心づき同行へもしかゝの物語りして佛前に向ひ懺悔念佛しけり其後三十日餘を経て思ひもよらざる所より再び見出しけるとなん

一武州寄玉郡保木間村に吉岳金兵衛といふものあり歸仏の念ふかくわきて淺草の観音を信仰し元文中の比百日の日参をはじめ雨風をもちとハず參詣しける観音の別當傳法院主是を奇特成ことに⁰⁶⁺おもひ或時金兵衛に語りていわくこの一顆の舍利ハ奥州無能和尚といへる尊き僧の

遺身茶毘の舍利なり和尚ハ極楽上品上生の地藏尊の化身也といへり今御邊の日參懈怠なき事の随在にたへずこれを授るなりとて賜りける金兵衛はからずも尊き舍利を得て限りなく悦び宝塔に安置し恭敬渴仰しける其後七日の別時間念佛をつとめ舍利前におゐて心中に祈念すらく我つね々念佛^{06ウ}すといへどもいまだ往生の得否をしらず仰ぎ願くハ我決定往生すべくんバ本地の威神力をあらハし給ひてこの舍利地藏尊となり給へとて一心に念仏しける別時結願の日に當つて宝塔を開き拜すれバ漸く伽羅陀山の地藏尊に似て右に錫杖左に宝珠を持給ふ金兵衛信心肝に銘じ念仏の一行をもて唯次の往生を得る事うたがひなしと決定信受しいよ々念佛の功をつミ日出度往生の素懐をとげ^{07オ}畢ぬかくて其舍利ハ日を経てさなから地藏尊と成給ふはじめハ小指のさき程ありてうす墨の色なりしが漸くに白く光りいできて水晶のごとく成給へり今現に奥州無能寺に安置するものこれなり

師の肖像造立の事

一師没後三年を経て享保六年六月の比奥州伊達葉折町角田三左衛門といふもの曾て師の教化に歸し念佛しける報恩の爲とて同志のものをかたらひ肖^{07ウ}像を造立せんことを志願す然るに羽州山形町に渋屋利左衛門といふ佛工有りけりこれももとより念佛者なりければ彫刻の事をたのミける利左衛門これを諾して彫ミ奉らんとて師の面貌をおもひめぐらしとかくすれ共心に浮ハざりけれバ翌年二月に至るまで彫刻ならざりけるしかるに二月二日いづくよりか旅僧一人淺黒の直綴を着し利左衛門が家に立より休息せしかバ茶など参らせて其容貌を見れば^{08オ}さながら師によく似たりけり折ふし同町の清兵衛又内などいふ信者居合せ侍りしが餘りよく似たることを不審におもひあひさ々やき居けるうち利左衛門ハかねて師の容貌心にうかまざる事を思ひ煩ひし事なれば手はやくうつし取けるほどなく旅僧ハ立出けるに跡見送りてけれハ隣町十

日丁といふ所にて見うしなひけるかくて旅僧の面貞をうつし不日に彫刻成就して北半田塞耳庵に安^{08ウ}置しけれバ歸依の道俗これを拜するに再ひ師に謁する心地して歸敬渴仰しける其後故ありて葉折へ安置す今の無能寺の肖像これなり此像種々の靈驗をあらハし給ふことこれありといへども禁を恐れてこゝにのせず

遺訓五件

- 一師示寂し給ふ前年享保三年十二月廿五日門人を集めて遺訓五件を書して帰依の道俗に遺囑^{09オ}せらるる其文にいわく
- 一 日課念佛同行ノ交リ親昵ニシテ而互ニ加ニ警策心行無ニ怠慢ニ被ニ致ニ相續ニ可レ被ニ遂ニ蓮託生之本懐ニ事
- 一 深信ニ本願ヲ兼テ弁ニ因果ヲ守リ廢惡修善之旨ヲ身持可レ為ニ如法ニ事
- 一 常ニ隨ニ如法ノ知識ニ或ハ交ニ深信同行ニ鎮西正統之安心起行無ニ僻謬ニ様ニ可レ被ニ為ニ用心ニ事
- 一 或ニ聞ニ他師ノ勸ニ或ハ自起ニ糖惑ヲ難ニ安心決定ノ者ヲ拜^{09ウ}見選択集御傳語
- 一 灯錄三部假名書等ニ安心可レ令ニ決定ニ若シ無キ其ノ裁量ニ行者ハ隨ニ如法深切之同行ニ可レ被ニ尋ニ問ニ之事
- 附 造ニスル選択御傳等ニ勸化ハ者都而不レ可ニ信用ニ之事
- 一 日課念佛契約之同行引而名号信受之行者永^{10ウ}至ニ子孫ニ念仏無ニ退轉ニ致相續ニ候様ニ可レ免ニ傳置ニ事

右五箇條画僧往生以後以ニ書付ニ所々同行中江^{10オ}可被申傳者也

享保三^戊年十二月日

興蓮社良崇学運無能 在判

無能和尚和歌集 附録終

無能和尚行状和讃

圓光大師の滅度より

不能述

はや五百年もすぎぬれど

念佛流通もひろからぬ

わきてあづまのあらゑびす

佛の道にハうとくして

つまかさね行後の世は

先ッひきおとすミつの海

かゝる流轉のよるべなき

超世悲願の念佛を

守一無能上人の

西方願王阿弥陀佛

大悲のちかひにもよほされ

うへなき無為のうてなより

石川郡須釜むら

二七の春よりおのづから

つるに元禄十二年

同国伊達大安の

良覚和尚を師とたのミ

梅福山に錫をかけ

研学程なく成ぬれば

二十あまりの六のとし

すみのころものいろそへて

こゝろもすめる草の庵

日につきよハにいねずして

いふよりほかハ津の国の

日課念佛十萬餘

常衣不卧の行状も

自誓の制誠いさぎよく

鄙のすまひぞあはれなる

あらき心のならハしに

むなしく月日をおぐるまの

業の秤のおもきとが

ふかきまよひぞかなしけれ

常没無縁をあはれミて

奥羽の邊土に弘通せし

仰で本地をたづぬれば

垂迹上品地藏尊

極楽浄土の九の品

たるゝ利生やみちのくに

矢吹氏の子とむまれ

歸佛の心いとふかく

十七歳のはるのすえ

精舎にのがれ此寺の

剃髮染衣の身となりて

自他の章疏を習字し

はやく名利をいとひツ、

うき世をのがれ山ずミの

まことの道のあさからぬ

露の命をしまねば

たすけたまへや阿弥陀仏と

なにはの事もすてゝたゞ

六字をかゝずくりこさず

数遍をはげまんためとかや

つゝめど世にもしらす玉の

もるゝひかりや四方にてる

化他の機縁も熟しツ、

数萬の人の群集せる

種々の奇瑞のあらハれて

又ハ菩薩と身を現じ

しめすみのりのことのはハ

またおろかなる人までも

日課念佛をうくるもの

帰依の男女の信水に

あるひは盲の目をひらき

あるハ靈夢を感じし

まれに誹謗のものあれバ

佛法守護の諸天神

邪見をのぞかんそのため

かりにも縁にあふ人の

信の芽ざしの生ずるハ

ほむもそしるもをしなへて

すでに化縁もつきしかバ

日ごろの不食増氣して

北をまくらに西に向き

その病中にかずゝの

つみにことしもくれたけの

三十にあまる七とせや

たゞ禪定にいるごとく

おん息つきさせ給ふとき

空にも樂のきこへしハ

徳になつきていつしかに

請に赴くところにハ

法のにはハふしぎやな

あるひは佛身相を作し

一子の慈悲のこまやかに

いかなるあさきこゝろにも

感じて信をおこしてハ

十七万におよぶなる

うつす佛の威光にや

又は難病快復し

終に見佛往生す

たちまち罰をかふむるハ

疑謗のたがをたゞしくも

折伏門の益ならん

ミのりの雨にうるほふて

大悲接受のめぐミかや

利益にもるゝものぞなき

享保三年ふゆのすえ

塞耳の庵にとゞまりて

臨終行儀に入りたまふ

勝境瑞夢いちじるし

松にともなふ春の來て

正月二日のあけぼのに

念仏のこゑともるともに

庵ハ三たび震動し

これぞ大千感動の

02オ

01ウ

01オ

03ウ

03オ

02ウ

文にかなひし往生の
化にあづかりし遠近の
霧の夜の夜半の月

かくやおもひやられてハ

さても滅後に松野氏

我ハ極楽上品の

蓮華三昧密經の

不可思議なりし利益にハ

闇維の灰よりいろくの

所化の信をぞましにける

濱の真砂の数おほき

吉正氏が信感に

地藏菩薩と化し給ひ

寶珠をさゝけたまふこそ

そのほかきこゆる得益ハ

筆の林にうつすとも

師の一代の事実をバ

また靈験の数の書に

われらいかなるえにしにて

在世滅後の化をうけて

今や師恩を念報し

あげて師徳を和讃して

大願成就の瑞ならぬ

四衆の悲歎ハこれぞかの

雲がくれますいにしへも

あハれを今にしられたり

またハ智源の夢に入ル

地藏なりとの御告ハ

深秘の説に符合して

六とせをすぎて改葬の

舍利を現じてなをさらに

そのしなくの感應は

中に武州の保木間村

わづかの舍利の増長し

右に錫杖ひだりにハ

まことに希代の示現なれ

たとひ硯のうみをくみ

はかりなきかなこの法の

宝洲所撰の行業記

くはしくこれをのせをきぬ

かくありかたき名徳の

生死をはなるうれしさに

その九牛が一毛を

至心に帰命し奉る

04オ

04ウ

05オ

05ウ

勸心詠歌集跋

夫倭歌ハ者王者ノ之德音ニシテ、而所シ以ナリ風ニ化スル人民ヲ也故ニ佛陀寄テ之ニ以テ
勸メ善ヲ神祇託レシテ之ニ以テ懲惡然則雖ニ方服之土ニト亦無嫌ニ諷詠スルニ

焉是ノ故ニ上古ノ高僧間亦ク有レ詠焉此ノ集ハ者東ノ奥無能尊者ノ之所ナリ詠

也尊者ハ蓋シ専修浄業之隱操其ノ為人斷々トシテ矣靡シ他技ニ豈ニ暇ラシ用ニ

意ヲ於倭歌ニ哉唯厭欣ノ之切ナル情動ニ於中ニ而顯ニ於言ニ者出ニ於其ノ自然ニ

耳尊者西邁ノ之後先師不能和尚揖ニ録ニ之ヲ命スルニ01ウ以ニ今ノ名ヲ用テ授ニ有信

ノ者唯シ此書ノ之未ダレ刻セ知レ有レコトヲ之者寡シ矣予毎ニ恐ニ其ノ湮没ニ近頃

某ノ上人齋ニ此集ヲ來テ告レ予ニ曰此ノ詠也也泥洹ノ之微韻一令下ニ諷誦者一ヲシテ

自ヲ勵ニ其心一身ヲ策中其情上可謂行者之湯藥也嗚呼道念ノ之02オ及レル斯

也禪暇ノ餘暇不レ可ニ私襲ニ如ニキハ尊者ノ之行蹟ノ乃有ニ行行業記及遺事一既ニ行ニ

于世ニ特ニ其ノ所レ詠倭歌ハ載ル者僅ニ十二三今將上下ニ木此ノ集併ニテ滅

後制誠之辭遺身舍利等ノ記以テ流中ト于世師ハ者是レ尊者ノ之嫡孫02ウ請フ一

言以テ助ニ流通ヲ予自顧ニ涼徳不文豈能ク重ニコトヲ此集ニ為ニ乎然レトモ法裔ノ

之誼不レ可ニ固辞ス因録ニ其顛末ヲ以テ為ニ之證明ヲ云爾

天明丙午冬十一月

東都城南長泉蘭若杜多智辨03オ

謹撰



堯雲之印

03ウ

各々喜捨淨財助刻靈名署

奉薦大僧止妙譽上人定月大和尚

薦尊蓮社兩誓阿仙上人

薦寂社空誓至順上人

廣嚴院一空融心居士冥福

涼雲院桃源常春居士冥福

清譽覺岸淨曉菴主冥福

法譽貞林法尼冥福

願以此功德平等施一切同發菩提心往生安樂國

薦行蓮社任譽運阿上人

薦明誓運良照不能和上

靜臨院善應道濟居士冥福

照雲院光岑桂月大姉冥福

教譽覺心法子冥福

德譽道本直心法子冥福

天明八龍戊申八月穀旦

東都驪山長泉律院藏版

レ04才

惠中 末湊成佛決断章

貞極上人 本願念佛感光章

貞極上人略傳 惠頓上人撰

東都小石川白山鳥居前

書肆 鳳金屋久兵衛

發行

レ04ウ

(せきぐち しずお 生活機構学専攻 教授)

受理年月日 平成28年9月30日

審査終了日 平成28年11月30日